

経営者「環境力」大賞を受賞して今思うこと―都会のビルを『省エネの棚田』に―

松江 昭彦（まつえ あきひこ／株式会社ユニパック 代表取締役社長）

去る8月28日より3日間「第7回アフリカ開発会議（TICAD7）」のビジネス EXPO ジャパンフェアに出展させて頂く機会を得ました。「質の高いインフラ」がテーマで、大手企業を中心とする46社の中で『洗浄再生フィルタによるCO₂削減』をアピールさせて頂きました。アフリカ各国の皆様は「中性能フィルタはリユースでき、使い捨てはもったいない」と丁寧に説明すると数多くのご質問を頂きました。

展示説明を通し、アフリカの皆様方の“環境意識レベルの高さ”に驚くとともに、世界最先端の知性に触発された良い機会となりました。

1) 環境報告書の新テーマを企業が希求

本年2月環境文明21より「環境力大賞」をいただいて以来、ここ半年で社内の空気が徐々に変わってきました。

それは、2007年に業界初の『洗浄再生中性能フィルタ』を東京ミッドタウンに納品して以来12年間、経費削減・人件費削減・消費電力削減の3つをテーマに苦戦しながらも、地道に拡販して参りましたが、ここに来て4つ目となる「事業活動に伴うCO₂削減」という新しい風が吹き始め、商談件数が増えだしてきました。具体的には、あるメガバンクが当社品を使いCO₂を削減した実績を公式ホームページに掲載したことにより、他の企業からの問い合わせが急増してきました。また、4年間に渡り省エネ効果を検証してきた某国内主要空港での年間550トンのCO₂削減と電気料金1,740万円の削減成果が地元経済界で話題になり、これも積極的な問い合わせにつながってきております。

これを思うに「世の中のSDGsの意識が大手企業の中で急速に高まってきた」「ESG投資を背景にCSR報告書のためのCO₂削減の手法

を求めている」のではないかと分析しています。

社内も今までの“販促活動”から“省エネチューニングによる責任ある数値の検証作業”へ変わってきました。私自身も“いかに売り上げるか”から“製品を通しどのように社会貢献を尽くしていくか”とビジネスの視点が変わってきたように思います。

2) 「地方創生SDGs官民連携プラットフォーム」に期待

去る8月31日に内閣府主導の「地方創生SDGs官民連携プラットフォーム」プロジェクトが正式にキックオフされました。「我が国におけるSDGsの国内実施の促進及びそれに資する『環境未来都市』構想を推進し（中略）広範なステークホルダー間のパートナーシップを深める官民連携の場」という構想です。

この取組により国と地方自治体と民間団体等がパートナーシップで“個別に生み出された省エネの成功事例を共有化し、知的資産として蓄積していく仕組みを、行政が施策として打ち出すのは素晴らしいと思いますし、弊社も是非会員企業として参画しレベルアップしていきたいと同プロジェクトに期待しております。

3) “もったいない”日本古来のエートス（道徳的気風）の復活が不可欠

しかしながら、政府のリーダーシップだけでは一方通行であり、それだけではパリ協定で日本が公約した大幅な省エネ目標の達成は不可能ではないかと危惧しております。

たとえ環境技術開発が進み（例えばLED照明、電気自動車、太陽光発電等）、ある一定の環境負荷は低減できたとしても、環境問題のすべてを科学技術等の合理性だけでは解決できな

経営者「環境力」大賞を受賞して

いと思えるからです。

一方、08年度版『環境・循環型社会白書』にあるように、江戸時代は完全な循環社会だったと言われます。主都江戸は、人口100万人を超える大都市（18世紀初めの世界100万人都市は、北京・江戸・ロンドンのみ）でありながら、廃棄物の出ない完全循環社会だったそうです。

有名なところでは、排泄物は農業にとって最も大切な肥料とされ、燃やした後の炭もさまざまな用途の資源とされ、衣服・紙も何度も再利用され、大切な資源として循環されてきました。

日本人には古来より資源を大切にす“もったいない”というエートス（道徳的気風）のDNAが備わっているようです。女性環境保護活動家でノーベル平和賞を受賞されたマータイ氏によれば、“もったいない”は日本独自の言葉であるとのこと。

政府の強靱なるリーダーシップと日本人の“もったいない”という心の両輪が揃ったときに、日本は他に類を見ない“環境先進国”となり、大量消費社会から初めて抜け出せるのではないかと考えます。

4) 塵を集めて山にする努力

「塵も積もれば山となる」という諺がありますが、省エネを進めていく上で大事なことは、小さな成果を積み重ねていく不断の努力だと思

います。何故ならばビル事業の場合、これから創出されるであろう省エネの新技术をもってしても、LED照明や高効率の熱源改修を除けば、その省エネ率はビル全体の1～3%くらいではないかと思うからです。これを小さいと捉えるか、大きいと捉えるかが大事な“分水嶺”となるのではないのでしょうか。むしろ、「塵を集めて山にする中長期的視点と忍耐力」が不可欠であると考えます。約40年間で大気塵を8分の1まで下げた実績のある（H26.環境省のデータより）勤勉で誠実な日本人ならば必ずや“不可能の壁”を破ることができると思いたいものです。

5) 都会のビルを『省エネの棚田』に

SDGsの挑戦はこれまでの大量消費社会の変革であり、ダイナミックなパラダイムシフトが必要とされるのは間違いないでしょう。

しかし、規制が先行するあまり窮屈な社会にならないためには“ロマン”が必要です。

私のロマンは「無数にある都会のビル一つ一つが『省エネの棚田』に育つ」という構想です。

例えば、屋上緑化には小松菜・亀戸大根・滝野川ゴボウ等の江戸野菜を栽培し、空調用室外機で小型風力発電をする等々の様々な小さな省エネの集合体としての『省エネの棚田』です。

江戸時代の先達が遺した“もったいない”のエートスを子孫の代に繋げていくロマンです。

